

## 四高考古資料と北陸人類学会

当資料館の所蔵資料に第四高等学校旧蔵の考古資料がある（以下四高考古資料と呼ぶ）。これは縄文・弥生・古墳時代の遺物を中心とするもので、27cm×59cm×深さ6cmの木箱54箱分、約1000点からなり、第四高等学校から金沢大学に受け継がれたものである。資料に付けられている注記を見ると、採集の日付の最も古いものは明治17年（1884）5月であり、最も新しいものは大正13年（192）4月27日である。採集地は金沢近郊・能登・越前・越中の遺跡名が多く記されている。それらの資料の一部は、明治28年（1895）に金沢で創設された「北陸人類学会」の機関誌『北陸人類学会志』に記載されている。四高考古資料の核となったのは北陸人類学会が採集した資料であり、その後学会が消滅した後も収集は続けられたようである。

以下、この資料をとりまく明治時代における石川県内外の考古学・人類学界の状況に少し触れてみたい。

### 須藤求馬について

四高考古資料と北陸人類学会を結ぶ人物として四高で教鞭を取った須藤求馬（すどうもとめ）があげられる。須藤求馬はどのような人物であろうか。

本学文学部・法学部・経済学部事務部に保管されていた履歴書によると、安政4年（1857）3月8日阿波国美馬郡三島村大字三谷（現在の徳島県美馬郡穴吹町三島）に生まれている。明治10年（1877）4月に長崎師範学校小学師範学科を卒業し、11年2月徳島師範学校に赴任するが、13年3月同校を退職し、東京に出ている。同年5月から15年7月まで中村正直の私塾「同人社」に学び、16年9月に、東京大学古典講習科漢書課に入学した。同人社は、明治6年



四高考古資料

に開塾し、当時は慶応義塾・攻玉社とともに三大私塾と称されている。一方、古典講習科は明治15年5月に東京大学文学部内に正規外の課程として設けられ、翌16年2月には甲部と乙部に分けられた。須藤の入学したのは乙部で17年に漢書課と改称したものである。中村正直はこの乙部の教授として漢文学・支那学を担当していた。

明治20年10月に同課を卒業した須藤は、23年7月に大阪府尋常師範学校に赴任するが、25年3月には退職し、同年7月第四高等中学校に赴任する。金沢では5年間過ごし、その間に北陸人類学会の設立に深く関わることになる。

須藤は明治30年（1897）8月に熊本第五高等学校に移籍。五高では、29年4月に赴任した夏目漱石と在職時期がほぼ一致している。熊本大学五高記念館に保管されている履歴書によると、須藤は33年9月28日に休職し、翌34年3月16日依願免官になっている。漱石の五高時代の交流には須藤の名は見えないが、31年11月11日の山鹿地方への修学旅行に伴う出張命令が両者の履歴書に確認できることから、何らかの関わりは想像できる。四高での須藤の活動は『学友会雑誌』、『北辰会雑誌』に散見するが、五高では『龍南会雑誌』の雑報欄に任免の記事があるだけで人類学・考古学の活動は確認できない。

五高を退職した須藤はいったん上京し、明治42年（1909）4月13日に奈良女子高等師範学校（明治41年開設）に赴任し、大正6年（1917）4月27日まで、在職していた（『奈良女子高等師範学校一覧』、1917）。

### 北陸人類学会の設立

坪井正五郎が中心となって明治17年に発足した東京人類学会は、明治20年代末には各地に影響を与え、地方人類学会が相次いで誕生した。北陸人類学会もそのひとつである。

須藤は四高では国語・漢文の担当であったが、考古学・人類学に興味を持っていたようであり、四高に赴任して2年目の明治27年夏に奥能登に調査旅行をしている。その時の状況は北国新聞の次の記事で知ることができる。

須藤求馬氏は昨年能州巡回の時瀬嵐で祝部土器、朝鮮土器、及び石鏃を発見し、松波で磨製の稍大なる石斧を獲、（以下略）（明治28年9月5日付）

また、28年春には河北郡大根布（大野～荒屋）の砂丘地で遺物採集を行っており、この調査についても北国新聞に記載されている。

加賀なる大野より荒屋に至る一帯の沙丘地にて貝塚土器、祝部土器、朝鮮土器、及び曲玉管玉、石斧石簇その他の石器時代の古物を発見したり。(中略)前記の石土器は大野荒屋間凡そ一里半余の地積にて黒土の露出せる処にあり(以下略)(明治28年9月5日付)

こうした調査を経て北陸人類学会設立に向かうのだが、それを大きく促したのは、28年の帝国大学理科大学人類学教室の八木柴三郎との出会いであったようである。八木は同年7月20日から23日間北陸地方へ学術目的の旅をし、主に加賀・能登・越中を踏査した。この時八木は金沢で第四高等学校教授岡村金太郎を訪ね、須藤は岡村の紹介で八木の知遇を得、前年の奥能登調査の時に得た遺物について語り、その一部を八木に贈っている。須藤はこの後東京人類学会に入会したと思われる(同会退会は大正3年1月)。

北陸人類学会設立直前の模様は、会誌第2編の「創立第一周年会務報告」に詳しいが、「世に公にし同好の士と相共にせんと評議此に一決」し、明治28年11月23日に発会式を迎えたのである。

#### 北陸人類学会の活動

北陸人類学会規則によれば毎月第1日曜日に定例会を開くことを原則とし、例会は数名の会員による講演があり、前回の例会後に採集した資料を展示し、会員相互の情報交換をはかる、というのが通常であった。会の活動は『北陸人類学会志』と『東京人類学会雑誌』に報告されている。28年11月創設以来順調な活動を続けており、30年8月に学会の推進役であった須藤が熊本第五高等学校に転任した後も、31年10月には会誌第3編が刊行されており、翌32年末までは毎月の定例会は行われている。しかし33年に入ると例会は滞りがちとなり、11月の創立第5周年記念会が会誌第4編(34年6月発行)にみえる最後の例会記事となる。東京人類学会の坪井正五郎は毎年の同学会創立記念会演説で過去1年の学界の動向について述べているが、33年10月、34年10月に、地方学



四高考古資料 須恵器

「第四高等学校敷地」と注記されている。筆跡は、須藤本人のものと思われる。

界の停滞に奮励を呼びかけているから、他の地方学会も同様であったと思われる。なお北国新聞では34年6月の会誌第4編発行の後、同年11月に学会第6周年記念会が、翌35年11月には第7周年記念会が行われたことを次のように報じている。

**北陸人類学会発会式廣告**  
 本月廿三日午前十一時當事務所に於て  
 發會式を舉行し且石器土器等八百餘  
 點陳列致候に付會員諸君御來會相成  
 度此致廣告候也  
 俱會員の紹介ある者は午後一時よ  
 り三時迄の紹介ある者は午後一時よ  
 明三時迄の紹介ある者は午後一時よ  
 治三時迄の紹介ある者は午後一時よ  
 内金澤市高岡町十一番地  
 北陸人類学会發起人

明治28年11月22日付北国新聞に見える発会式廣告

(前略)次で幹事の任期満限に付改選を行ひしに北山重正、板谷勤川、金子次郎三氏再選となれり夫より板谷氏は『大原女の風俗に就て』の題下に写生画数葉を示し一場の講話を試み終りて更らに茶話会を催し午後五時過ぐる頃散会したりと因に同会にては明春を期し雑誌第五号を発刊せん筈にて材料収集中なり尚目下全国にて東京、札幌、奥羽、松本、四国、中国、台湾各人類学会あるも雑誌を出すは東京を除くの外当北陸のみなれば旁々明年より一層会務拡張の方針を取り雑誌の材料をも吟味する処あるべしとなり(明治34年11月25日付)

記事で、板谷勤川とあるのは石川県工業学校に在職中の板谷波山(陶芸家・日本芸術院会員)である。第6周年記念会を報じた新聞記事からは会誌第5編刊行の意志があった事がうかがえる。

北陸人類学会は明治廿八年の創立にして其年の十一月廿三日をトシ発会式を舉行したるものなれば本年は即ち七周年に当れば依りて一昨日市内香林坊なる同会事務所に於て記念会並總會を開催せり当日の出席者は斯道に熱中せる十数名の会員に止りしが午後三時に及て先づ幹事北山重正氏は開会の辞を述べ次で前一年間の事務状況及び会計報告を為し尚ほ祝電数通を朗読せり(以下略)(北国新聞、明治35年11月25日付)

さて明治35年(1902)の創立7周年記念会後の会員の消息については『東京人類学会雑誌』から断片的に知る事ができる。36年7月に東京帝国大学理科大学助手大野延太郎が北陸・東海へ調査目的の出張をした際、北山重正が金沢で協力しており、出口米吉は同志に精力的に民俗学関連の論文の投稿を続けている。また、37年10月に行われた「東京人類学会創立満20年紀年祝賀会」に須藤求馬の出席が確認され、北陸人類学会が活動を停止した後も、彼らは人類学と関わりを持ち続けていたことがわかる。

(付記)情報・資料収集に、熊本大学附属図書館草野隆夫氏、および石川県埋蔵文化財保存協会三浦純夫氏の御協力をいただいた。(在田則子 資料館)